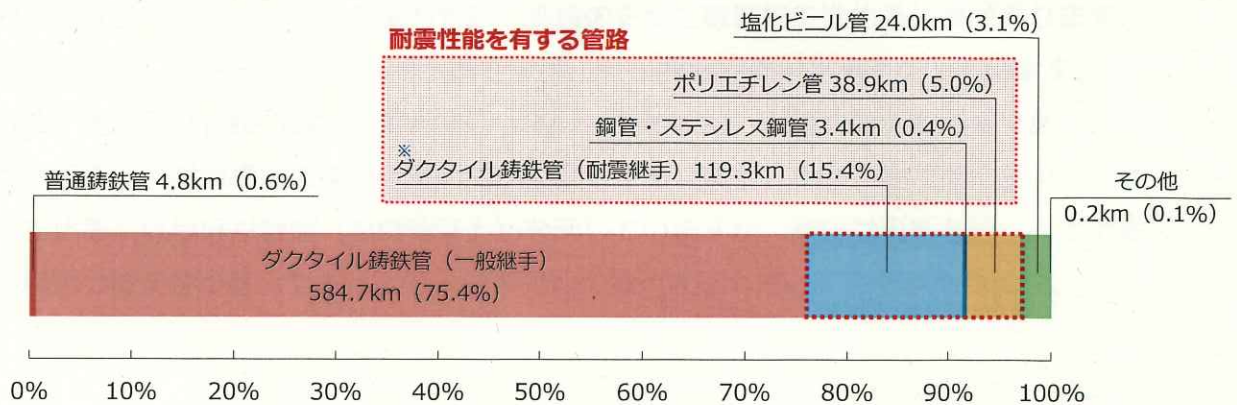


## (5) 地震対策の現状

今後発生する可能性がある大規模地震に備えるために、本市では水道施設の耐震診断を順次行い、その結果に基づき耐震補強及び更新を計画的に進めています。

浄水施設の耐震化率は、まだ30%程度しか進んでいませんが、配水池の耐震化率は徐々に増えており2015年度末では91.4%（2017年度末：100%）で他都市よりかなり進んでいます。

管路については、阪神・淡路大震災を教訓に老朽管路の更新において、1995年からは基幹管路※、2006年度からは全ての管路において耐震管※を採用するなど耐震化を進めており、耐震化率は2015年度末時点で20.8%と他事業者よりも進んでいます。



図表 2-9 管種割合 (2015年度末)



図表 2-10 管路の耐震化率の推移

【基幹管路】水運用上、重要度が高く、代替え機能のない基幹的な管路のことで、本市では導水管、送水管、配水本管（口径400mm以上）のこと。

【ダクトイル鋳鉄管】鋳鉄に含まれる炭素を球状化することで強さや伸びに優れた材質の鋳鉄管。

【耐震管】耐震性の高い材質（ダクトイル鋳鉄管や鋼管など）を用い、ダクトイル鋳鉄管については、耐震継手構造（NS、GX継手など）を有する管のこと。

経営指標の比較の結果、『財務の状況』を示す指標では、「事業収益対資金残高比率」、「企業債残高給水収益比率」、「給水原価」は、他団体平均と比較して良好な数値となっています。

一方で、「経常収支比率」、「料金回収率」は他団体平均を下回っているものの、ともに100%を超えており、経営の健全性が保たれている状況と言えます。

『施設の状況』を示す指標では、「施設利用率」、「有形固定資産減価償却率」、「管路経年化率」は他団体平均と比較して良好な数値となっています。一方で、「管路更新率」については、他団体平均と比較して低い数値となっていますが、**2016年度は、優先順位の高い大口径の基幹管路の更新に取り組んでおり、投資額に比べ更新延長が伸びなかったためです。**ただし、P20で示すとおり、今後、耐用年数を超える管路が年々増加する状況にあるため、楽観視できる状況ではなく、今後も管路や施設の更新を継続的に進める必要があります。なお、「有収率」は他団体平均と同水準ですが、95%程度と高い水準となっています。

今後、施設及び管路の適切な更新を行っていくためには、財源の確保が必要であり、適切な財源確保、財源構成の検討を進めていく必要があります。また、現時点において「経常収支比率」は良好な数値（100%以上）を示していますが、適切な更新を行った上でもなお経営の健全性が確保できるよう、経営基盤の強化を図っていく必要があります。